

2011年1月25日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 臼井 文子 様

中央大学図書館 永井 夏紀
日本社会事業大学図書館 八神 加奈
立教大学図書館 宮尾香奈子
(大学名 50 音順、3 大学 3 名)

2010年度海外集合研修報告

2010年11月21日(日)~11月28日(日)まで、2010年度海外集合研修に参加いたしましたので、別紙のとおりご報告いたします。

2010 年度私立大学図書館協会海外集合研修報告書

I. 研修概要

1. 研修テーマ

「カナダの大学図書館探訪」

カナダの大学における先進的な図書館サービス・運営の具体的な事例に直接触れ、最新の取り組みなどの情報を得る。また、スタッフとの質疑応答を通し、図書館の組織・運営体制・サービスのあり方など参加者の所属図書館での実践的な課題設定や提案に結びつけるとともに図書館職員相互の国際的な人的交流を実現する。

2. 訪問先

University of British Columbia Library (Vancouver)

大学 URL <http://www.ubc.ca/>

図書館 URL <http://www.library.ubc.ca/>

University of Victoria Library (Victoria)

大学 URL <http://www.uvic.ca/>

図書館 URL <http://library.uvic.ca/>

3. 研修日程

期間：2010年11月21日(日)~2010年11月28日(日)

1日目：11月21日(日) 19:00 成田空港発 10:55 バンクーバー空港着

2日目：11月22日(月) 9:30~19:00 University of British Columbia Library

3日目：11月23日(火) 9:30~16:30 University of British Columbia Library

4日目：11月24日(水) 9:00~13:30 University of British Columbia Library

5日目：11月25日(木) 9:30~19:00 University of Victoria Library

6日目：11月26日(金) 9:30~12:00 University of Victoria Library

7日目：11月27日(土) 13:55 バンクーバー空港発

8日目：11月28日(日) 17:25 成田空港着

II . 事前準備

1. 事前確認、研修

参加者の担当業務、業務経歴等を情報交換し、各々、訪問先の Web サイトや関連文献を調査した。質問事項調整のため、顔合わせを兼ねた打合せを一回行った。

2 . 訪問先への質問事項リスト作成

参加者から訪問先への質問事項を収集、調整してリストを作成し、事前に事務局をとおして送付した。

3 . 事前説明会の開催

11 月 10 日 (水) 立命館東京キャンパスにおいて、事務局から研修日程や訪問先との連絡状況などの事前説明を受けた。

III . 研修報告

目 次

1 . 訪問機関概要	p.4
2 . 利用者サービス	p.6
3 . ラーニング・コモンズ	p.9
4 . UVic の情報リテラシー教育戦略	p.11
5 . 利用者満足度の測定 (Library Assessment & Surveys)	p.12
6 . コレクション・マネジメント	p.14
7 . デジタル化の方向性 (IT and Digital Initiatives)	p.15
8 . 図書館開発と資金調達 (Library Development and Fund Raising)	p.20
9 . 長期計画とイニシアチブ (Library Strategic Plan and Initiatives)	p.22

1.訪問機関概要

A. University of British Columbia

概要

ブリティッシュ・コロンビア大学(英: University of British Columbia、略称 UBC)は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州に 1908 年に創設された州立総合大学である。同州の西海岸バンクーバー市の西端に位置するメイン・キャンパス (UBC Vancouver) をはじめとして、同州ケロウナ市のオカナガン・キャンパス (UBC Okanagan)、バンクーバー中心部にあるロブソン・スクエア・キャンパス (UBC Robson Square)、そしてバンクーバーの東地区にあるグレートノーザンウェイ・キャンパス (UBC's Great Northern Way Campus) の合計 4 つのキャンパスがあり、およそ 5 万人 (学部学生はおよそ 4 万人、大学院学生はおよそ 1 万人) の学生が学んでいる。留学生も多く、140 以上の国から学生を受け入れているが、もっとも多いアメリカ以外では中国、韓国、日本など東アジア地域からの学生も相当数おり、インドネシア、インドなど南西アジアからの学生も多い。タイムズが毎年秋に発表する世界の大学ランキング (Times Higher Education-QS World University Rankings) において、2009 年は 40 位とされている。

UBC 図書館はカナダで 2 番目の規模を誇る研究図書館である。中央図書館と分館の合計数 23 館には合計で 590 万冊以上の蔵書、52 万点以上の電子ブック、61 万点の電子資料、520 万点以上のマイクロ資料、83 万点以上の地図・図画資料などを所蔵している。年間の入館者数は 300 万人、貸出冊数は 250 万冊、560 万人がウェブサイトを開覧し、ページリ

クエストは 6,200 ページにものぼる。275 名のフルタイム図書館職員（うちライブラリアンは 80 名）と年間 300 人の学生アルバイトにより運営されている。

B. University of Victoria

概要



ビクトリア大学（英：University of Victoria、略称 UVic）はカナダのブリティッシュ・コロンビア州の州都ビクトリアに位置する総合大学である。1903 年にビクトリアカレッジ（英：Victoria College）として、モンリオールのマギル大学付属の分校として創設された。1920 年にビクトリアカレッジは UBC の付属校となり、1963 年にビクトリア大学として独立した。学部生 16,475 名、大学院生 2,858 名、全教職員数 4,478 名（内学部教員 843 名、職員数 2,190 名、その他 1,445 名）である。また、キャンパス内に 700 匹以上のウサギが生息していることでも知られている。

図書館は、William C. Mearns Centre for Learning (<http://www.uvic.ca/buildings/lic.html>) 内メインの McPherson Library の他、Diana M. Priestly Law Library (<http://library.law.uvic.ca/>) と Curriculum Library (<http://library.uvic.ca/site/clic/default.html>) の 2 分館である。図書館全体の職員数は 144 名で、その内 33 名がライブラリアンである。190 万冊の図書資料、230 万点のマイクロ資料、20 万点の地図資料、47,000 点の雑誌、69,000 点の録音資料、37,000 点の楽譜、10,000 点のビデオ資料、1,350 メートルの原稿や記録文書、膨大な量の電子資料を所蔵している。

メイン図書館がある William C. Mearns Centre for Learning は 2008 年に建て替えられており、カフェの併設や教室の増設など、ラーニング・コモنزの実践に適した作りとなっている。また、視聴覚資料や楽譜を提供する Bessie Brooks Winspear Music & Media Commons も併設され、録音データの編集ができる 8 台のマルチメディアパソコン iMac を導入するなど、メディア・コモنزの充実にも力を入れている。実際に、建て替え後の調査で、学生や教員の満足度が上がったというデータが報告されている。

図書館はデジタル・イニシアチブ活動を展開し、その一環として、貴重資料のデジタル化に取り組んでいる。特に力を入れているのが、ブリティッシュ・コロンビア州の史料のデジタル化である。1858 年～1910 年に刊行された新聞や 1846 年～1876 年の地図など、地域の人々の関心を集める史料をオンライン公開している。興味深いところでは、1910 年頃の日本の写真コレクション *Life In Japan, ca. 1910 by Herbert Geddes* をデジタル化していることである。写真は、1908 年～1918 年横浜に滞在したバンクーバーの貿易商人 Herbert Geddes が撮影したもので、当時の日本の生活風景が鮮やかに記録されている。

2. 利用者サービス

2-1. コミュニティにおける役割

UBC : 多様な要求に応える

UBC 図書館では、閲覧部門で主に 3 つの領域においてサービスの見直しを行おうとしているところである。貸出部門責任者(Circulation Manager)からお話をうかがった。

一つ目は、バンクーバーだけでも 14 の部局(物理的な分館数は 23)に分かれている UBC 図書館の運営方針を、いかに中央へ集約していくかということである。14 部局がそれぞれに行っているサービスを、ただ 1 つの図書館で行っているかのように統合していきたいとのことであった。

中央図書館である Koerner Library はじめ、全館の運営はすべて Circulation Manager に任されている。分館のなかには、Robson Square Library のように繁華街に設置されたきわめて小さなものもあり、責任者は UBC 図書館という大規模な組織にしながら、小規模図書館の運営も同時に経験することになり、多様な組織のあり方に対応しなければならない。

各分館はもともと、独立して運営されてきた歴史を持っているため、それぞれに異なる考え方を維持してきた。運営方法もシステムも同一のものをを用いるよう、各分館を「同じページに載せていくこと」が責任者の抱える課題となっている。例えば、図書館カードの代わりに、5 年前から大学の ID カードで貸出等の認証を行うようにした。これにより、貸出サービスの統一が図れるとともに、セキュリティ上の問題を各館独自で抱えずに済むようになった。

大学構成員に対するサービスは統一の方向で動いているが、多様なコミュニティ向けの図書館カードを発行し、地域住民へのサービスを充実させようとしており、こちらも煩雑になっている。

各コミュニティへのサービスはすべて契約に基づくものである。卒業生カード、ビジネス・カード、スクール・ステューデント・カード(高校生レベル対象)、地域住民カード、他大学所属者向けカードなど種類が多く、交渉にあたる専属スタッフがいるほど、それぞれに利用条件が異なっている。コミュニティの構成メンバーによって使いたい施設や資料に差があるため、カードの種類によっては、電子媒体資料を使う場合には、別にアクセス・カードという 1 日利用のカードを購入してもらう必要がある。米国の大学図書館との協定では、どちらかがカードを発行するのではなく、お互いが交換で発行することになっている。卒業生で毎年 1,000 弱、ビジネスで 200 前後の登録がある。

二つ目は貸出サービスのあり方の見直しである。資料については紙媒体から電子媒体への転換がどうなっていくかを見守っていたが、学生がよく利用する資料の 70%が紙媒体であることがわかり、出納と書架整備に関わるスタッフは変わらず多数確保しなければならないと考えている。多くは学生アルバイトの雇用で補っている。

8年前から自動貸出機、5年前から Automated Storage and Retrieval System (ASRS : 自動書庫出納システム) を導入し、貸出に関わるスタッフを減員した。当初は機械を導入することに対してスタッフから疑問の声があがっていたが、実際に導入してみると、貸出に使うスタッフをもっと違うところに生かすことができるようになった。リザーブ・ブック部門の責任者は学生が必要とするリザーブ・ブックを常に利用可能なように用意し、行方不明図書を検索し、新たに購入すべき図書や雑誌の情報を追いかけている。貸出部門の責任者は、図書館システムそのものの仕組みに精通し、使いにくいところやエラー防止策について常に問題意識を持ち続けている。利用者情報データベースの管理もまた重要な問題であり、アカウント設定が正確になされているかをチェックし、必要があれば修正を行うようシステム部門との交渉も行っている。

ASRS は自動書庫と OPAC の連携による、人手を介さない資料予約システムであり、大学構成員であれば誰でも利用したい本をオンラインで直接リクエストし、受取館を選択できる仕組みを実現できた。2011年1月からはこのサービスをコミュニティ・カードの所有者にも広げる予定で、個人がオンラインで直接リクエストできるシステムが確立することになる。

三つ目は自動書庫の導入によって生じたスペースをいかに活用していくかという課題である。ラーニング・コモンズ開設はその取り組みの一つである。Irving K. Barber Learning Centre の仕事は図書館としての機能だけでなく、スペースそのものの運営というところへ重点が変化している。同じ建物の中に人文社会科学系図書館と機関リポジトリの事務局等も入っており、関係者間の調整、交渉を行うことが日常的に大きな役割となっている。

学内外からの要請に応えるよう常に変化していこうという姿勢が強く見受けられ、実際に旧中央館をラーニング・センターに変身させてしまうなど、かなりダイナミックな取り組みに成功している。学内における図書館の存在感を増すことに最大限努力しており、その成果もあがっている様子であった。大規模組織で運営方針を完全に統一することは困難な道のりであるだろうが、彼らの実行力をもってすれば可能なことであると思われる。

UVic : 遠隔地の学生へのサービス

遠隔地居住および通信教育の学生に対するサービスは、電子媒体資料がオンラインで利用可能になった今でも、まだまだ需要のある分野となっている。通信教育は 80~100 コース提供され、サービス対象は 7,000 名近くに上る。遠隔地に住んでいる学部生または通教生のために図書資料や雑誌記事のコピーを郵送するサービスを続けており、サービスの平等性を保つために送料無料で行っている。資料探しや事項調査のレファレンスにも対応しており、かなり手厚いサービスとなっている。

レファレンスに対応するための手段として e-mail や電話以外に、e ラーニングシステム (Illuminate) を利用しているが、時にこういったシステムは通信トラブルに見舞われ、お互

いに何を言っているのかわからないという事態に陥るため、もっと使い勝手のよいシステムがないか、mixiのようなSNSを用いて何かできないか、といった模索が続いている。

来館サービスにおいても、学部においてどのような教育が行われているかということは図書館が押さえておくべき情報として欠かせないものだが、遠隔サービスにおいてはより重要で、教員との連携は特に大きな課題となっている。ライブラリアンだけが努力しても学生のニーズを的確につかむには限界があり、常に更新された情報を持っていることが重要だが、今後も課題として取り組み続けることになるだろう。

大学院生向けには送料やコピー代などの実費を徴収するかたちでのサービス提供となるため、今後はもう少し院生に力点を置いたサービス展開をしていきたいとのことであった。

ちなみに、UBC・UVicともに閲覧サービス、カタログ、ILLは、Ex Libris社の図書館業務システム Voyager で一括管理している。州立大学図書館であるため、ILLは無料のサービスとなっている。ただし、公立図書館への現物貸借はチャージが必要となってくる。日本の大学図書館でも注目されている e-DDS (Electronic Document Delivery Service) は、Post-to-Web と呼ばれており、UVic 図書館では、Relais International 社のシステムを用いて、2009年5月15日からサービスを開始した。依頼者には、文献へのリンク付 e-mail を送付する。リンクの有効期間は2週間である。学生や教員には、図書館に文献複写を取りに来る手間が省けるため、とても好評とのことである。

2-2. 障害者サービス

UBC、UVicともに、通常の印刷媒体を利用できない障害者や身体障害者に対する支援が整えられている。UBCではあまり詳しく話を聞くことができなかったが、紹介されたWebページからの情報を参考に記述する。UVicでは図書館が改築されて間もないこともあり、ハード面での障害者サービスを中心に記述する。誰にでも利用しやすい環境づくりは、日本の大学図書館にとって大きな課題である。

UBCの障害者サービス

UBCの障害者サービスで特筆すべきは、Access & Diversity (<http://www.students.ubc.ca/access/index.cfm>) である。このセクションでは、障害、人種や民族、性別を超えてすべての学生や教職員に同じ環境レベルで、大学生活が営めるよう手助けしている。

今回は実際に訪れることはできなかったが、図書館における障害者サービスの中心地は、Crane Library である。ここでは、通常の印刷物が利用できない (print disability) 学生や教職員のために情報を提供するサービスを行っている。所蔵資料は、テキスト、一般書、参考書などの録音資料、点字資料、拡大資料、音声読み上げ機能をも備える電子資料 (e-text) であり、音声認識コンピュータや、活字読み上げ用コンピュータ、点字リーダーなどの機

器を備えている。

UVic の障害者サービス

UVic のメイン図書館である McPherson Library は、2008 年に改築を行ったことにより、ハード面で障害者に配慮するサービスが見受けられた。

特筆すべきは、身体障害者用にベッドを備えたレスパイトルーム (Respite Room) が図書館内に設置されていることである。座って資料を閲覧することが困難な場合、この部屋でベッドに横になりながら閲覧することができる。ベッドの隣には介護用リフトが設置され、車椅子からベッドに容易に移動できるようになっている。レスパイトとは、「小休止」という意味であるが、介助等で介助者が疲れきってしまうことを防ぐために、一時的に負担を軽減するという意味でも使われている語である。



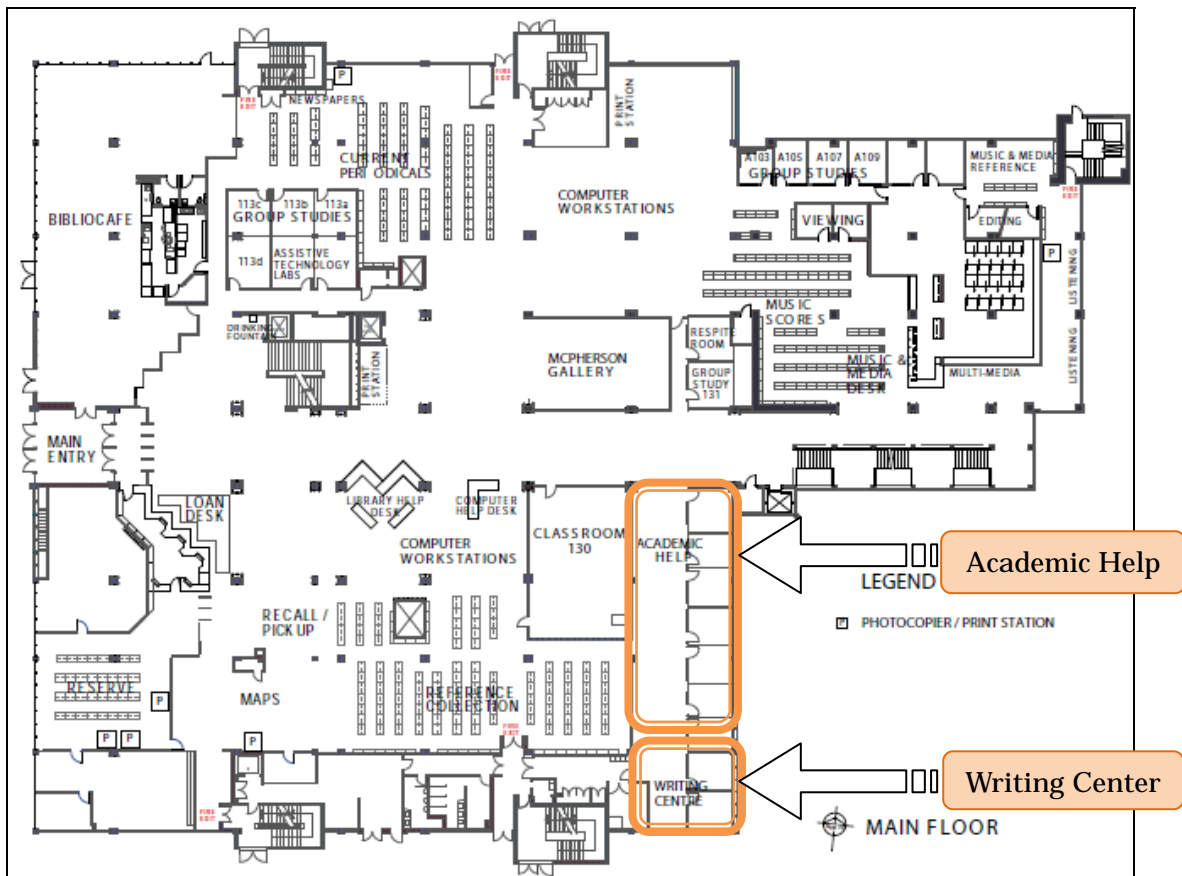
カウンター前のサイン

他にも、ドアノブ横に点字シールを貼付したり、車椅子用の閲覧席・視聴覚資料閲覧席の用意であったり、メインサービスカウンター前に「障害者や要援助者は列の前方へ」とのサイン表示があったりと、障害者への様々な配慮が見られた。

3. ラーニング・コモンズ

* UBC のラーニング・コモンズについては 2009 年度海外集合研修報告を参照のこと

UVic では 1999 年頃から集密書庫の導入等マイナーチェンジを開始し、2005 年に大口の寄付金による予算の目途がついたこともあり大規模増改築にむけて本格的な検討を始めた。その後 1 年以上にわたり、建築士と担当のライブラリアン達が何度も打合せて設計図を固め、2008 年に新図書館完成・開館した。フロア構成はウェブサイトのフロアマップで確認することができる (<http://library.uvic.ca/site/about/FloorMaps.html>)。



増改築工事でのポイントとした点は主に次の5点が挙げられる。まず1点目は建物入口（図書館ゲートの外）横にカフェ（BIBLIO CAFÉ）を設置し、ゆるい学習空間とすることで図書館へのアプローチをスムーズにしたことである。

2点目は各種カウンター、サービス・スポットを片側に固め、入口に立つとロビーの右側に貸出カウンター、レファレンス・デスク、ライブラリー・ヘルプ、コンピューター・ヘルプといった各カウンターが一望できるようにしたことである。建物内の壁や床の色は白に統一されているが、入口からカウンターに続く廊下は木のナチュラルな色合いになっている。これは木の色や質感の精神安定効果を利用し、カウンターに安心感をもって向かわせる仕掛けでもある。

3点目はパソコン席を多数配置し、映像や画像処理に適した Mac PC や映像編集機材なども完備した点である。ちなみに地元住民もパソコンを1回ごとなら無料で利用可能である。4点目は、メイン通路の脇に、ガラス張りの講習会室を設置し、常時実施している様々な講習が可視化され、通りがかりの学生でもふらりと参加することもできる点である。

3点目はパソコン席を多数配置し、映像や画像処理に適した Mac PC や映像編集機材なども完備した点である。ちなみに地元住民もパソコンを1回ごとなら無料で利用可能である。4点目は、メイン通路の脇に、ガラス張りの講習会室を設置し、常時実施している様々な講習が可視化され、通りがかりの学生でもふらりと参加することもできる点である。

最後の 5 点目が他部署とのコラボレーションにより図書館内に設置した学習解決ワンストップ・サービスとしてのラーニング・コモنزである。



入口から奥に向かって以下の小部屋または区画（パーティションで移動も可能）が設けられている。

Peer Helping & Learning Skills（カウンセリングセンターによる総合相談）

Career Help（キャリアセンターによるキャリア相談）

Math & Statistic Help（学部による数学・統計相談）

Chemistry Help（学部による化学相談）

Physics Help（学部による物理相談）

Study Solutions（ノートテイキング、試験対策やレポートの書き方といった各種ラーニングスキルアップ講習を不定期に実施、相談も可能）

Writing Center（あらゆる論文の客観的なアドバイスを受けられる、添削はない、予約制）

この一角に異なる部局からのスタッフが集まって協働することによりラーニング・コモنزは運営されている。1 学期に数回現場のメンバー同士で、また 1 学期に 1 回は各部局責任者同士でミーティングを行ない、よりよい運営にむけて協力している。

4. UVic の情報リテラシー教育戦略

担当者の役職（Teaching and Learning Librarian）は 2007 年にできたポジションである。Information Literacy（情報リテラシー）という単語は非常に便利で図書館界でよく用いるが、単語の意味を正確に理解しているのはカナダにおいても図書館関係者のみで、他部署からは「図書館で教えること」イコール「図書館学的知識」と誤解されがちである。

大学院生の割合は 13%で大半が学部学生となるため、講習会の開催割合は学部学生向けに 75%、院生向けに 15%実施している。大半は教員からの申し込みに応じて実施するが、図書館側からも教員に対して各種講習会の実施を呼び掛けて実施数を増やしている。

講師を担当するライブラリアンは分担して講習会を実施するが、個人により年間 2, 3 回の人から 1 人で 57 回も担当した人まで様々である。学部によっては、一部の学生が重複し

て参加するために学生数よりも述べ参加者が上回っているが、理系学部では理系分野のライブラリアンが退職により不在のため学生の参加率が低くなっている。

効果的な情報リテラシー教育を行なうために特徴的な学生の生活パターンを分析する、講習会のポートフォリオを作成するなど、より効果と質の高い内容にするための戦略的な努力・取り組みを続けている。今後の課題としては、理系の講習会の充実と、万能検索サイトよりも学術的なデータベースのほうが有益であることを学生に気づかせていくことである。

5. 利用者満足度の測定 (Library Assessment & Surveys)

5-1. UBC におけるアセスメント

UBC 図書館では、アセスメント専門のライブラリアン (Assessment Librarian) が様々な測定ツールを用いて UBC 図書館の提供する各種プログラム・サービスといった側面について調査・測定し、分析結果をもとに図書館サービスを改善すべく館内に還元している。北米では多くの大学図書館でアセスメントを実施しているが、アセスメントのみを行なう専門家として Assessment Librarian を配置している大学は数えるほどしかない。今回は限られた時間の中で LibQUAL2010® の分析結果についてお話を伺った。

LibQUAL+®とは、北米研究図書館協会 (ARL: Association of Research Libraries) がテキサス A&M 大学と共同で開発した、利用者による図書館サービスの評価ツールであり、現在では世界で約 1000 の大学図書館が利用している (<http://www.libqual.org/home>) が、日本においてはあまり普及しておらず実施している大学図書館はごくわずかである。

LibQUAL+®は、3 分野の基本的な設問 22 個と追加質問、任意のコメント欄から構成されている。基本的な設問の内訳は、「サービスの姿勢 (Affect of Service)」9 問、「情報の管理 (Information Control)」8 問、「場としての図書館 (Library as place)」5 問である。

UBC では 2010 年の 3 月に「UBC はより一層あなたのお役に立ちます、そのヒントを教えてください (How can UBC Library serve you better? Please tell us!) をキャッチフレーズに学部生・院生・教員に対して調査を実施した。前回実施した 2007 年と比較すると、物理的に頻繁に来館する利用者は微減していたが、ウェブ経由の電子資料利用数は変わらず、図書館が行う情報リテラシー教育の効果について、自身のアカデミックな教養 (academic discipline) や情報収集スキルが向上したと答えた利用者が増加している。

回答者の約半数が記入するコメント欄には、来館時・ウェブ経由とともに求める資料へのスムーズなアクセス方法の確立を望む声が最も多かった。かつてコメントに多く書かれた記述「グループで勉強できるスペースの充実」は Irving K. Barber Learning Centre 開設以降は減り、逆に「もっと静かに勉強できるスペースの増加」を求める声が増えている。

しかしこのような尽きることのないニーズについて UBC 図書館は全くネガティブには捉えない。刻一刻と変化し尽きることのない利用者のニーズこそが、利用者のための図書館づくりと図書館の新たな未来創造のために不可欠な宝の山であると担当者は語ってくれた。

5-2. UVic におけるアセスメント

UVic ではアセスメントの強化を目的に関連部署 (IT and Client Services) にアセスメントアシスタント (Assessment Assistant) というスタッフを新たに設置し LibQUAL+® の実施・分析に力を入れている。

LibQUAL+®による調査は、カナダの他大学実施時期に合わせ、2003 年、2006 年、2007 年、2008 年、2010 年に実施してきた。実施時期は回答率が低くなる秋を取りやめ、今後は春に実施することにしている。2010 年の結果は今後さらに分析を深めていくとのことであったが、概要としては以下の通りであった。

学部生・院生・教員全ての対象において 22 の質問項目のほぼ全てに満足度が高く、サービスへの評価は飛躍的に向上した。担当者にとって驚きだったのは、本を借りる以外にほとんど図書館のサービスや施設を利用しないはずの教員が、「サービス」と「場としての図書館」に対する満足度を非常に高く評価したことである。教員はとかく厳しい評価をつけるものだが、たとえ自身が利用しなくても、ヘビーユーザーである学生に好まれるサービス・施設というものは教員にとっても望ましいものであることがわかり、図書館全体が一層の自信と誇りを持てたという。

一方で、院生・教員から多く寄せられる要望は、コレクションの充実 (研究上必要な一般性の低い雑誌・電子ジャーナル・学会誌を望む声) とウェブサイトの使いやすさの改善である。しかしながら、研究者によるコレクション不足に対する不満は、コレクション予算が非常に多い他の大学においても常に寄せられるものであり際限がないため、ある意味では肝を据えて向きあう必要のある要望だという。またウェブサイトについては最近リニューアルしたために前のサイト構成に慣れていた利用者からは不満があるものの、Serials Solutions 社の統合検索サービス (Summon) を導入したことで利用者の検索時の満足度は飛躍的に上がったため、現サイト構成の有効な案内方法を課題としている。

その他、学生から寄せられる要望は、グループ学習による騒音に対する不満 (特に個人学習の形態が多い理系・人文科学系の学生は静粛な学習環境スペースの充実を望む傾向にある) と、院生からの院生専用スペース充実を望む声である。これは時として利用者間のトラブルにも発展する複雑な問題でバランスのとり方が難しいものの、喫緊の課題として認識し、院生専用スペースの拡充にはすでに着手している。

担当者は、利用者の相反する様々な要望に対して、適切な優先順位をつけて対処していく必要があり、対処できない場合も説明責任を果たす姿勢が大切であると述べていた。

6. コレクション・マネジメント

電子ブックや電子ジャーナルといった電子媒体資料がシェアを拡大している今日、UBC と UVic 両大学図書館においても、年間電子媒体資料購入数は、印刷媒体資料購入数を圧倒的に上回っている。コレクション・マネジメント業務において、そうした時代の潮流への対応とその課題について話を伺った。

6-1. UBC のコレクション・マネジメント

UBC では、Collections & Scholarly Communication を担当する副館長 (Associate University Librarian)、電子媒体資料を担当する目録・受入部門のライブラリアン (Technical Services Librarian)、経営学研究図書館 (David Lam Management Research Library) のライブラリアン、医学系リエゾン・ライブラリアンの計 4 名に話を伺うことができた。

主な話題は、コレクションが印刷媒体資料から電子媒体資料へと移行していることである。移行の理由は、次の通りである。まず、以前はサイエンス分野の電子媒体資料が主体であったが、現在ではどの分野でも電子媒体資料が容易に手に入るようになったことである。電子ブックや電子ジャーナルは増加の一途をたどり、様々なプラットフォームで提供されており、CLOCKSS や Portico に参加することで、コストは高いものの、電子媒体資料の長期保存も保障されるようになり、安定した提供が可能になっている。

さらに大きな理由として挙げられるのは、スペースの問題である。UBC 図書館では、大学当局から場所を縮小するように要求されている。180 万点もの資料が収容できる大型自動書庫システム (ASRS) を有しているものの、毎年 30 万点ほど増加する印刷媒体資料をどう収容するかといった問題は、UBC でも頭の痛い問題である。また現在では、カタログから伺った話によると、雑誌については電子媒体に移行しても、UBC 図書館がカナダ国内のデポジット・ライブラリーの役割を負っているため、印刷媒体を 1 部残すことが使命となっている。そのため、まだまだスペースの問題は大きな課題となっている。

電子媒体資料に対する学生の需要は高い。学生は i-pod といった携帯端末で、学外でも閲覧できる電子資料に親しみを持っている。インターン活動などで忙しい学生が、ビジネス関係資料を学外から閲覧できることは、大きなメリットとなる。

以上のような理由で、電子媒体資料への移行が加速している。課題としては、電子媒体が提供されるプラットフォームがベンダーにより様々であるためカタログの作成が難しく検索しにくいという点、コンソーシアムに加盟して対抗してはいるものの電子ジャーナル等の価格高騰を免れない点、また、資料形態について選書時に印刷媒体か電子媒体のどちらを選択するかという基準やポリシーが特に決まっていないので、その策定といった点である。

ちなみに、財務担当のライブラリアンによると、図書館総経費約 3,300 万ドルのうち、40%の 1,300 万ドルは人件費、45%の 1,500 万ドルがコレクション経費、残りが消耗品や機器等の経費となっており、コレクションに最もコストがかかっているとの話であった。

6-2. UVic のコレクション・マネジメント

UVic では、電子媒体資料購入担当部主任、目録部門主任、ILL 部門主任のライブラリアン 3 名から話を伺うことができた。

UVic 図書館の年間資料購入費は約 600 万ドルで、その予算からモノグラフや電子媒体、視聴覚資料、マイクロフィルム、政府資料といったコレクションを購入している。UBC と同じく、UVic でも印刷媒体資料の購入費が削減され、電子媒体資料の購入費が増えており、今日では約 75%の 400～450 万ドルに上っている。約 90%の雑誌を電子媒体に切り替えたという。膨れ上がる電子媒体資料費に対抗するため、CNSLP (Canadian National Site Licensing Project, <http://library.queensu.ca/libguides/cnslp/faq.htm>)、CRKN(Canadian Research Knowledge Network, <http://www.crkn.ca/home>) や、COPPUL(Council of Prairie and Pacific University Libraries, <http://www.coppul.ca/index.html>) といったコンソーシアムに加盟して出版社やベンダーと交渉を行っている。

選書は 15 名のライブラリアンが行い、必要な分野の資料を選んで購入してはいるものの、半分は YBP といった書店のパッケージを自動的に購入している。電子ブックは、印刷媒体資料と同じくらいの価格であり購入しやすい上に、データをダウンロードして携帯端末で閲覧可能であり、レポート作成時に引用箇所をコピー & ペーストできるなど、学生にとってもメリットが大きい。課題は UBC と同じく、提供される膨大な電子ブックパッケージからのカタログ作成が難しいということである。

7. デジタル化の方向性 (IT and Digital Initiatives)

7-1. 地域社会への貢献

UBC : The Chung Collection

UBC の Rare Books & Special Collections (RBSC, <http://www.library.ubc.ca/spcoll/>) 部門では、ブリティッシュ・コロンビア州の歴史に関わる資料を収集することが使命である。本、地図、手稿などを、政治、産業などあらゆる分野について収集している。一方で、図書館は大学の歴史に関する資料収集を行って大学アーカイブにも貢献しており、学部や教

員、卒業生などとも協力関係にある。コレクションのある Irving K. Barber Learning Centre の建物は、そうした協力関係の現れの一つとして、複数の機関が共有して運営されている。

貴重書の多くは温湿度管理が行き届いた自動書庫へ収納しているが、写真やフィルムなどの特殊資料は湿度 40～50%でより厳しく管理された別の保管庫へ入れている。自動書庫は RBSC 部門からも直接操作できるようになっており、利用者から希望のあった資料を、貸出部門の担当者へ依頼しなくても取り出すことができる。貴重書の閲覧は、貴重書閲覧室で一度に 3 点まで請求することができ、学部学生も利用可能である。

貴重書コレクションで特に重要なものとして、Chung コレクション (<http://chung.library.ubc.ca/>) がある。Chung コレクションは心臓外科医の Wallace Chung 博士(以下、Chung 博士)と、婦人科医の Madeline Chung 博士(以下、Madeline 博士)からの寄贈によるものである。Chung 博士はカナダで初めての大陸横断鉄道であるカナダ太平洋鉄道に強い関心を持っており、その関連のコレクションが充実している。同時に、ブリティッシュ・コロンビア州および、中国系移民の歴史にも造詣が深く、コレクションの内容もそれに即したものとなっている。

カナダ太平洋鉄道は、ブリティッシュ・コロンビア州がカナダの一部として認められるのに一役買った存在であり、1888 年に蒸気船の太平洋航路がブリティッシュ・コロンビアから運行されるようになると、多くの日系、中国系移民の玄関口として、カナダ全土へ受け入れるきっかけを作った。特に、バンクーバー地域における中国系移民社会は規模が大きく、彼らの歴史を残すことは移民の歴史を残すことといっても過言ではないくらいである。Madeline 博士は中国語のできる数少ない女性婦人科医として、移民社会に大変な貢献をしてきたことで有名とのことである。

寄贈コレクションは膨大な数量に上っており、貴重書閲覧室の奥に造られた特別展示室で常設しているのは、全体の 5%に過ぎない。展示品には、移民勧誘ポスターや、渡航時の携行品(スーツケースに詰められた状態のものもある)、当時 500 ドルで入手できた入国証、入国後の納税証や鉄道会社の株券など、移民に関わる物品が多岐にわたり含まれている。多くの移民を運んだ蒸気船 Empress of Asia 号の精巧な模型もあり、見学者の興味を引くのに十分な内容を備えている。

RBSC 部門のスタッフはライブラリアン 3 名、アシスタント 4 名、プラス、アルバイトという構成である。資料のデジタル化設備が RBSC 部門に置かれており、貴重書庫の資料の整理とともに、アーカイブまたは図書館学を学ぶ学生アルバイトを雇って作業にあたらせている。常設展示を始めたものの学芸員がいないため、展示品を増やす、特注の展示架を作成するなど、内容を発展させるための取り組みが難しいのが悩みだが、カナダ国内でも貴重な移民資料であるので、将来はコレクションすべてをデジタル化し、公開したい考えとのことである。

UVic : 州立大学が担う役割

UVic 図書館ではデジタル・イニシアチブ活動により、館内にデジタル化のための設備を整え、さまざまな貴重資料のデジタル化に取り組んでいる。スキャンニングのスタッフとカタログラーのチームで作業を行っている。

中でも最も力を入れているのが、ブリティッシュ・コロンビアの歴史を紐解く資料のデジタル化である (http://library.uvic.ca/site/spcoll/sc_digital/)。1858 年から 1910 年にかけてのゴールド・ラッシュ期に刊行された新聞のデジタル化プロジェクトを進め、“*The British Colonist*” や “*The Colonial Despatches*” について、マイクロフォームまたは現物からの取り込み作業を行った。実施に当たっては、英国の The National Archives や国内の Ike Barber B.C. Digitization Project など外部機関がスポンサーとなり、地域貢献を目的としていることが特徴である。

国内で入手不可能なものについては、英国の The National Archives と契約の上、有料でデジタルコピーを作成しに行っており、図書館の所蔵資料のデジタル化にとどまらない、スケールの大きなプロジェクトとなっている。デジタル化した紙面は Web 上で公開しているが、プリントアウトやコピーはできない仕組みで、必要があればプロジェクト・チームへ依頼してハード・コピーを取寄せることが可能である。

OCR を使わずに手作業でインデクシングとメタ・データ付与を行っており、これによって、誰でも簡単に紙面検索が可能なデータベースの作成に成功した。実際に、地域住民によるいわゆる「ルーツ探し」に使用されており、移民としてカナダに渡ってきた祖先の足跡をたどるのに恰好の資料となっている。

他に特色あるものとしては、先の 2 つの世界大戦で召集された兵士のインタビュー・コレクション (<http://library.uvic.ca/site/spcoll/military/miloral.html>) があり、Web 上で聴くことができる。

UVic におけるデジタル化は、地域の要請に応え、一般の人がアクセスしづらい資料を Web 上に載せ、誰でも利用できるようにすることが第一義となっており、州立大学として、ブリティッシュ・コロンビア州およびビクトリア地域に貢献することを常に念頭においている。移民、ことに中国系移民に関する資料のコレクションも一部ながら Web 上で公開しており、UBC 同様、移民が支えてきた州の歴史を記録し、遺していくことへ使命をもって取り組んでいる様子が見えがえた。

7-2. UBC の Web サービス

Web サイト運営

UBC の IT システム・マネージメントは 22 名の技術者と 1 名のシステム・ライブラリア

ンで行っている。システム・ライブラリアンの下には9名のスタッフがおり、プログラマ5名、Web サイト管理者4名で、図書館システム (Voyager) と UBC の Web サイトの運用管理を行っている。UBC の規模に比して Web 管理者の数が少ないが、当初は2~3名の担当で運用していたこともあり、スタッフは増えた方である。これは、UBC が Web サイトを一方向的に情報を伝えるだけでなく、利用者とコミュニケーションをとる手段ととらえているからであり、その意味ではさらにスタッフを充実させる必要があると感じているとのことであった。

2011年には大学のWebサイトを更新予定である。現在は、学部や部署によってデザインにばらつきがあるので、2年くらいかけて統一していく予定である。コンテンツの編集には、権限さえあれば誰でもどこからでも編集が容易であることから、wiki (UBC wiki, http://wiki.ubc.ca/Main_Page) を採用している。デザインの制御は現在 CMS で行っているが、CMS には限界を感じており、wiki に移行予定である。

サイト構成としては、学生の使い易さに重点を置く予定である。拠点となる Workplace を UBC wiki 上に作り、ここから学内のすべてのコンテンツへ移動できるようにしたい。同じ内容を繰り返し掲載するのではなく、複数の入り口 (リンク) を用意して、同じ一つのページへ移動する仕組みを徹底させたいと考えているとのことである。

デジタル化プロジェクト

デジタル化プロジェクトに携わるスタッフは5名である。

資料のデジタル化については、教員と学部が何をデジタル化するかを決めており、特殊コレクションで学生に見せたい資料をデジタル化したいというケースが多い。大学アーカイブとして、写真資料や Yearbook のデジタル化も行っているが、数としてはそれほど多くない。図書2000件のデジタル化プロジェクトも進行中である。

デジタル化の実作業は学生アルバイトが担っており、スキャナで取り込むか、カメラで撮影した画像を使って各ページを作成している。外注せず、オリジナルで作業を進めている。ソフトウェアは OCLC の CONTENTdm を使用しているが、CONTENTdm には一連のコンテンツを、本をめくるように展開していく機能がないため、ページをめくるようにしてブラウジングできるアプリケーションを独自に開発中である。

手元のない資料をデジタル化の対象とすることもあるため、トロントにある2大学との共同作業となっている。新聞に関しては60,000ページを既にデジタル化して搭載した。

教員から要請のあった資料について教育目的でデジタル化し、機関リポジトリ (cIRcle) に登録するプロジェクトも実施している。cIRcle のコンテンツを充実させ大学構成員のアクセスを保障するために、教員から図書館に対して数百万ドルが寄付されたこともあり、デジタル化プロジェクトは学内外からの要請に基づいて、今後も力を注いでいくことになるとのことであった。

7-3. 機関リポジトリ

UBC cIRcle

UBC の機関リポジトリ cIRcle (<https://circle.ubc.ca/>) は、Dspace1.5.1 を基盤に動いており、教員、学部、研究室、研究開発者、教育課程、学部教育に関わる人や機関など、それぞれが独自にコミュニティを作成・運営できるようになっている。cIRcle のスタッフは管理者として、コミュニティ参加者が cIRcle を円滑に利用できるようなサポートを行うのみである。したがって、論文の内容について事務局が踏み込むことはなく、書誌データが正確に入力されているか、登録ファイルが正常に動くかなどの事務レベルのチェックにとどまっている。

cIRcle の Dspace は独自にカスタマイズされており、コレクションまたはコミュニティごとの購読機能(Reporting Suite)、ファイル変換機能(Fire Conversion)、エンバーゴ機能が追加されている。トップページおよび論文ごとに統計を見られるようにしており、月間・年間アクセス数、ダウンロード数、国別アクセス数などのデータを誰でも見ることができる。cIRcle のブログも運営し、最新トピックの紹介を行っている。

専属のスタッフは 3 名で、コーディネーター 2 名、Term project librarian 1 名で運用している。Term project librarian はコーディネーターとともに管理者としての仕事を担うほか、主に 2010 年の冬季オリンピックに関するコンテンツ収集活動に当たっている。作業のサポートには、図書館情報学専攻の院生アルバイトを雇っている。

コンテンツには現在、Dspace のバージョンによる制約で、HTML とエクセルファイルを登録することができないが、PDF、ビデオ、パワーポイントファイルなどは登録可能である。将来的には Web サイトもアーカイブしたいと考えている。

著作権処理については Dspace 上の同意書に公開レベルや記事の種類(学術誌掲載記事か、未発表原稿かなど) を記入して承認する仕組みを備えている。Creative Commons License (<http://creativecommons.org/>) を採用し、商業目的での使用を許可するか、登録後の編集を行うか、他人とどこまで共有するか、といったレベルを論文ごとに決めて投稿できるようにしている。

2005 年から試行期間を持ち、2007 年からは試験的に大学院生の修士論文、博士論文を登録するプロジェクトを開始した。1974 年から 1989 年の間に提出されたものから登録をはじめ、現在はこれに加えて 1992 年から 2006 年のものまで遡及ができています。

1919 年に UBC で初めて受理された修士論文から 1927 年にかけての 100 論文は、“UBC’s first 100 theses” (<http://www.library.ubc.ca/archives/first100/>) として、大学の 100 周年記念アーカイブに採用され、Web 公開されているが、コンテンツは図書館の cIRcle チームが登録したものである。2008 年以降は修士論文と博士論文の提出そのものを cIRcle から行うことになり、院生自身が登録する仕組みが整った。

政府助成を受けた研究の成果も cIRcle 上で公開したいと考えており、コンテンツ収集に努めているが、現在登録されているのは 4,5 件にとどまっているとのことである。

大学の研究成果の公開はもちろんのこと、デジタル化プロジェクトや大学アーカイブとの連携により、cIRcle をとおして教育コンテンツの充実を図ろうという姿勢が見られる。今後の展開が期待される大規模リポジトリである。

UVic DSpace

訪問中、Digital Initiative の一つとして UVicDSpace (<http://dspace.library.uvic.ca:8080/>) の名前があがったものの、詳細な内容が話題に上ることはなかった。UVic における機関リポジトリの取り組みは、日本国内における一般的な機関リポジトリの取り組みと同じような状況のようである。UBC のような大掛かりなプロジェクトとして特筆する部分は見受けられない。

Web サイト上で、機関リポジトリとは何か、どんなコンテンツを掲載するのか、コンテンツを掲載することで、コンテンツ作成者にどのようなメリットがあるのか、といった内容を紹介しているに過ぎない。院生に対しても、論文や研究の投稿を促すメッセージを発信して入るが、「掲載を希望する人」が UVicDSpace に登録できるのであって、全員が必ずリポジトリに学位論文を登録しなければいけないのではない。

地域貢献を強く意識したデジタル化プロジェクトとともに、今後大学の研究成果公開の場としてどのような展開をしていくのか、楽しみである。

8. 図書館開発と資金調達 (Library Development and Fund Raising)

UBC、UVic とともにブリティッシュ・コロンビア州政府から資金を供与されている。しかし、そうした資金が削減傾向にある昨今では、相当部分を個人や財団による寄付金で賄っている。資金を調達し、図書館を開発・発展させていく業務は、図書館にとって最も重要な仕事の一つに位置づけられている。

8-1. UBC の図書館開発と資金調達

今回、Irving K. Barber Learning Centre 内にある UBC Library Development Office で 2 人のライブラリアンに話を伺うことができた。1 人はディベロップメント・ライターという役職で、資金調達のために UBC 図書館をアピールする資料製作を担当している。もう 1 人はディベロップメント・コーディネーターという役職で、資金獲得のため、実際に個人や

財団を訪問して信頼関係を築いている。

このセクションでは、毎年 300 万ドル相当の資金を州政府、個人、財団等から調達している。ほとんどは、建物等スペースのための資金と、コレクションのための資金である。調達した資金は、図書館の改築費用や、コレクションの維持保存費用等に充てられている。例えば、Irving K. Barber Learning Centre の改築、アジア図書館の中国語貴重書コレクションの電子化といった事業である。

資金調達には、図書館を効果的にアピールし、サポーターを増やすことが求められる。そのため、寄付者向け広報誌 “Friends” や Irving K. Barber Learning Centre の広報誌 “Connects” といい印刷媒体の広報誌や、オンライン広報誌の発行、貴重書コレクションをモチーフとしたグッズ作成等で、図書館の PR をしている。また、卒業生は重要な PR 対象である。UBC では、遠距離通学の学生が多く、卒業後は大学と疎遠になってしまう。そのため、卒業した後も図書館を活用してもらうよう、Irving K. Barber Learning Centre を改築して居心地の良い環境を提供するなど、ホームとして活用される図書館づくりに力を入れている。図書館は、蔵書閲覧目的以上の場としてさらに、Twitter や facebook といった Web ツールを導入し、そこから得た情報を、個人プロフィール作成の一助としている。

資金調達業務に関わるライブラリアンのためのネットワーク会議に、ALADN(Academic Library Advancement and Development Network,<http://www.library.arizona.edu/aladn/index.html>)がある。現在、65 のアメリカ合衆国とカナダの大学図書館、研究図書館が加盟している。対象者は、図書館開発や資金獲得を専門に行っているライブラリアンと専門ではないがそれらの業務に携わっているライブラリアンであり、相互の情報交換の場となっている。館長や副館長といった役職者も出席し、資金調達のための効果的な手法について話し合う。会議は毎年開催され、主催校は持ち回りで投票にて決定される。UBC は 2012 年に ALADN の主催校となることが決まっている。

8-2. UVic の図書館開発と資金調達

UVic 図書館では、Division of External Relations で、25,000 ドル以上の資金調達を担当しているディベロップメント・オフィサーという役職のライブラリアンに話を伺うことができた。

UVic の各学部については、全教員が資金調達の役目を担っている。各分野のサポーターを探すため募金活動を行い、研究棟や体育館の改築費用等を調達している。同様に図書館でも、大学に何らかの関わりがあるコミュニティにアピールして、建物の改築費用等の資金調達を行っている。そのコミュニティとは、学生、卒業生、その保護者や子息、令嬢、大学関連業者などである。また、コレクションの獲得、保存、電子化のための資金調達として、地域の人々にも寄付を呼びかけている。例えば、ブリティッシュ・コロンビア州の中国人移民史料アーカイブのための資金であれば、中国人コミュニティに PR して、寄付者

を募っている。

資金調達方法は、小額であれば、ダイレクトメールの送付や電話で寄付を呼びかける。大学当局には、Annual Giving Team と呼ばれる資金調達チームがあり、卒業生や寄付前歴者に向け、50 ドルや 100 ドルといった小額の寄付を対象として活動している。

しかし、25,000 ドル以上の多額の寄付となると、一方的なダイレクトメールや電話といった方法ではなく、有力者との間に信頼関係を築く必要がある。地元の有力者のもとに何度も足を運び、調査プロファイルから興味をひきそうな話題を分析して、図書館をアピールする。そして、図書館のためにどのような寄付ができるかを説明し、長い時間をかけて信頼関係を築いていくのである。こうした成果で、卒業生より 500 万ドルの寄付があり、その名を冠した Mearns Centre for Learning が 2008 年に図書館に増築された。

さらに、寄付者に対しては、フリーのコミュニティ・カードを提供している。図書館を利用してもらうことで、より図書館のニーズを知ってもらうことができる。これにより、更なる寄付につながるというメリットがある。

9. 長期計画とイニシアチブ (Library Strategic Plan and Initiatives)

先駆的にラーニング・コモンズ環境を整備している UBC・UVic 図書館の長期計画は、その環境をより良いものに革新することに主眼を置いている。その中で、リサーチ・コモンズ (Research Commons) という大学院生や専門研究者を支援する取り組みや、コミュニティに開かれた場としての図書館の在り方が注目されている。

9-1. UBC の長期計画とイニシアチブ

UBC では、国際図書館連盟 (IFLA ; International Federation of Library Associations and Institutions) の次期会長となる Ingrid Parent 図書館長 (University Librarian) のお話を伺う機会があった他、Planning & Community Relations 担当の副館長 (Associate University Librarian) にお話を伺うことができた。

まず、UBC 図書館の最重要課題は、「デジタル化」と「場の創出」である。図書館は Irving K. Barber Learning Centre に例示されるように、学生がインターネットを利用する場、コミュニケーションを通じグループ学習をする場、静かに集中して勉強できる場を提供すべく、学生のためのスペースの革新に力を注いできた。さらに、大学当局は、学内の学生に留まらず、国際化や広範なコミュニティにコミットする場へと図書館を発展させる方針を打ち出している。

UBC 図書館は、デジタル化によって、広がりつつながりのある場の創出は可能と考えて

いる。すなわち、遠隔地の学生や、大学に足を運ぶ機会のないコミュニティの人々に対し、オンラインでの資料閲覧サービスの提供や、情報リテラシー講義を動画で配信することにより、どのコミュニティに所属していても、学術情報へのアクセスが可能になるということである。

大学側は教育と学習(Teaching & Learning)の場として図書館を活用する方針である。そのため、図書館では情報リテラシー教育に力を入れ、ライブラリアンが学内外に向けて講義する機会を増やしている。また、貴重書コレクションの利用を促すために、講義に貴重書を利用するよう教員に働きかけている。現状では、歴史的研究に携わる教員は、貴重書の利用に積極的である。しかし、それ以外の教員には利用される機会が少ないため、今後の課題となっている。

次に、Parent 館長に今後の重要課題を伺ったところ、大学院生をサポートするためのリサーチ・コモンズ (Research Commons) とデータ資料や灰色文献へのアクセスの確保との回答であった。リサーチ・コモンズとは、大学院学生や専門的研究者に高度な学術情報と研究の場を提供するものである。有数の地図コレクションを誇る UBC 図書館では、Geographic Information System (GIS: 地理情報システム) を利用する研究者への支援の充実を図りたいとのことである。

また、データ資料や灰色文献については、研究者の血と汗の結晶である重要な資料であるにも関わらず、個人のコンピュータの中でデータが眠ったままになっている現状が多々あるため、そういったデータにアクセスできるような環境を整えていきたいとのことであった。ただし、データや灰色文献は収集経路が限られていることやカタログ作成が難しいこともあり、その整備は非常に困難な課題である。

9-2. UBC の人事戦略

UBC では図書館における人材開発の最高責任者 (Director, Human Resources) からお話を伺うことができた。大学全体の人事部門に所属し、図書館内の人事を専門に行なっている。館長の下に 9 つの部門 (資料収集[Collections]、人事[Human Resources]、企画・地域貢献[Planning and Community Relations]、サービス[Public Services]、資金・設備[Finance and Facilities]、ラーニング・センター[Irving K. Barber Learning Centre]、広報・マーケティング[Library Communications & Marketing]、システム・情報技術[Library Systems & Information Technology]、デジタル化推進[Library Digital Initiatives]) があり、各部門の最高責任者 (Director) は、ライブラリアンとしての責任を果たすと同時に、9 名でマネジメントチームを構成して部門ごとのマネジメントを行なっている。

現在図書館にはフルタイムのスタッフが 275 人おり、うち 80 人がライブラリアン、残りの 195 人がライブラリー・アシスタントおよび事務職員である。また年間 300~350 人の

学生をアルバイトとして採用し、時間外の閲覧カウンターや書架整理、各プロジェクトの業務を行なっている。学生アルバイトの多くは、1週間に平均10時間程度のシフトで勤務している。また国際学専攻の学生や留学生も積極的に採用し、図書館活動の他言語サービスに必要なサポートを行なっている（日本、中国、香港、韓国など）。

<採用までのプロセス>

はじめに「人文社会科学系図書館」の一般的なライブラリアンの職務分析説明書（Job description）を例に説明がなされた。Job descriptionには緻密な分析に基づいた、職務内容、職務に必要な作業・設備・能力・資格・条件・責任範囲・義務、そして達成目標などが細かく記載されている。次に管理職レベルのライブラリアン（Head Librarian）には、ライブラリアンであることとあわせて第一に担当部局全体に対するマネジメント能力とリーダーシップが重要視される。よって管理職のJob descriptionには、部局全体をマネジメントする能力をはじめとして、全スタッフのマネジメント、コレクション・マネジメント、予算折衝能力、時には施設・スペース獲得の折衝まで責任が要求されている。

<採用から人材開発まで>

図書館内の人事においてもっとも重要で時間を要するのが、採用に係る一連のプロセスである。80人のライブラリアンのためには80通りの個別のJob descriptionを入念に準備する必要があり、150人のライブラリー・アシスタントのためにも約100のJob descriptionが必要となる。Job descriptionの作成・見直しから実際の採用、適正な給与の支払いに多くの時間を割いている。また、日々変化する環境の中で各スタッフが担当業務に十分なスキルを持っているのかを確認するため人材開発や育成にも多くの時間を費やしている。これらのプロセスを進めていく上で同時に必要なのは、各種法令の知識と法令順守・組合との合意である。採用した後は様々なルールに従いながら必要に応じて適切なアドバイスや評価、育成を行なう。

9-3. UVicの長期計画とイニシアチブ

UVicでは、長期計画とイニシアチブに特化したセッションは組まれていなかったものの、Marnie Swanson 図書館長（University Librarian）から以下のようなお話を伺うことができた。

Web ページ上の UVic 図書館の 2010 年～2012 年長期計画 (<http://library.uvic.ca/site/lib/admin/stratplan/TheStratPlan.pdf>) を見ると、「人・教育の質・コミュニティ・情報資源を強化する」という項目が掲げられている。2008 年に行った McPherson Library の改築により、このプランはより実践しやすくなった。学生にラーニング・コモンズを提供し、カフェテリアや、視聴覚資料を提供するメディア・コモンズを創ることで地域のコミュニティにも開かれた場を提供している。

ラーニング・commonsの実践としては、ティーチング・アシスタントのシニア学生が、同じ立場の学生たちに、レポートの書き方や試験勉強のアドバイスをするピア・ヘルプを行うなど、学部学生に主眼を置いた取り組みがなされている。

Swanson 図書館長に伺ったところ、これからのプランとして重要になることは、UBC 図書館と同じく大学院生への支援であるとのことであった。現在、大学院生のための閲覧室(Graduate Student Study) が用意されており、ゾーン計画を担当している館長補佐



(Assistant University Librarian) によると、さらにスペースを広げたいとのことであった。具体的にリサーチ・commonsという表現はなされなかったが、趣旨は同じである。

また、不景気により資金調達が困難になってきている状況を受け、業務の効率的コストダウンという課題が浮上している。Swanson 館長の話によると、カタログ作成に関しては、基本的に書誌ユーティリティからのコピー・カタログングで作業しているため、アウトソーシングも可能性の一つとして検討しているとのことであった。

コレクション・マネジメントの件でも触れたが、選書に関しては、購入資料の半分は業者によるパッケージを受け入れているとのことであった。また、Assistant University Librarian から日本の大学図書館での選書のアウトソーシング状況について質問を受けたことを鑑みると、選書のアウトソーシングについても、大いに興味があるようである。今後、アウトソーシングが進むとすれば、長期計画に掲げている「教育の質・情報資源の強化」とのバランスをうまく取ることが課題となってくるであろう。

IV . 各機関担当者

University of British Columbia Library

Dr. Suzanne Scott, M.A. / Coordinator, Operations & Planning

University of Victoria Library

Mr. Ken Cooley / Associate University Librarian, Reference and Collection

V . 謝辞

今回の研修にあたり、UBC ならびに UVic の担当者の皆様には、事前のプログラム作成に始まり、当日の道案内からプレゼンテーションに至るまで、幅広くお世話になり、大変感謝しています。特に、まだ早い寒波に見舞われ雪の散らつく中、慣れない土地で不安を感じないようにとご配慮くださった、Dr. Suzanne Scott と Mr. Ken Cooley には心から感謝の意を表明したいと思います。

このような研修の機会を与えてくださった私立大学図書館協会をはじめ、国際図書館協力委員会事務局関係者のみなさまにも心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

以上